

2026（令和8）年度 教養学部国際教育学科 一般選抜（中期）講評

1. 出題の意図

課題文は、日本における外国にルーツを持つ児童・生徒が、キャリア形成において特有の困難に直面していることと、その支援のためのさまざまな取り組みを紹介している。重要なのは、こうした不利な状況が親世代から子世代へと引き継がれやすく、放置すれば再生産される構造をもっている点である。問題では、その構造を捉える社会（科）学的想像力と、負の連鎖を断ち切るために学校・教師が現場で何をなすうるかを、論理的かつ倫理的に考察する力を問うことを狙いとしている。

2. 採点のポイント（長文問題）

問7

本文で紹介されている具体的な取り組み（民間企業によるキャリアセミナー、教育社会学者による労働法教育、大使館による教育フェア）を正確に読み取れているか、また、その狙いや意図された効果を論理的に把握できているかを見た。

問8

外国にルーツを持つ子どもたちのキャリア形成という、多くの受験生にとって日頃からなじみのあるテーマとは限らない題材について、社会状況や身近で見聞きした事例を踏まえながら、想像力を働かせて考察し説得力ある論の展開ができるかを問うた。

3. 答案の傾向

問1

概ねよくできていた。誤答の例として、“work”、“gather”、“decrease”、“expansion”等が見られた。

問2

概ねよくできていた。

問3

概ねよくできていた。

問4

概ねよくできていた。

問5

日本の入試制度の複雑さに言及する解答が目立ったが、それは進学率とは関係しうるとしても、就職活動における苦勞と直接関わるものとして本文中で明言されているわけではない点に注意されたい。また、日本語として意味の通らない文や、誤字・脱字なども減点対象とした。

問6

概ねよくできていた。一方で、“firing”を「炎上」や「ファイリング（分類）」と誤訳する解答がいくつか見られた。また、“are subjected to”を過去完了として捉えた解答もあった。

問7

概ねよくできていた。一方で、「ブラジルでセミナーが開催された」という本文の誤読や、「日本に定住する傾向が強まった」といった表面的な理解にとどまり、効果の実質を十分に捉えきれていない解答が一部に見られた。

問8

困難については様々取り上げられていたが、それらを解決するための直接的な取り組みの提案については、やや具体性に欠けるものや、ありきたりな内容に留まるものが多かった。

以上